

臨床看護師のself-efficacyと看護師がいきいき働く経験の意味

| | |
|--------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 著者 | 中谷 章子 |
| 発行年 | 2018 |
| 学位授与大学 | 筑波大学 (University of Tsukuba) |
| 学位授与年度 | 2018 |
| 報告番号 | 12102甲第8782号 |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00153887 |

| | |
|-----------|---------------------------------------|
| 氏 名 | 中谷 章子 |
| 学 位 の 種 類 | 博士（看護科学） |
| 学 位 記 番 号 | 博甲第 8782 号 |
| 学位授与年月 | 平成 30年 6月 30日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 審 査 研 究 科 | 人間総合科学研究科 |
| 学位論文題目 | 臨床看護師の self-efficacy と看護師がいきいき働く経験の意味 |
| 主 査 | 筑波大学教授 博士（看護学）竹熊カツマタ 麻子 |
| 副 査 | 筑波大学准教授 博士（保健学）柴山 大賀 |
| 副 査 | 筑波大学准教授 博士（ヒューマン・ケア科学）川野 亜津子 |
| 副 査 | 東京情報大学教授 博士（工学）川口孝泰 |

論文の内容の要旨

中谷章子氏の博士学位論文は、日本人看護師の経験とそれに関連する心の動きを学術的に記述することによって、看護師がいきいき働く経験の意味と、活気が感じられる病棟の看護チームの特徴を明らかにし、充実感を抱ける看護実践は何なのか、何によって self-efficacy を抱くことができるのかについて探究した研究である。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

著者は、看護を対人関係のプロセス、すなわち、看護師が関係性を築く対象である病人やその家族、ともに働く人々など多くの人間同士の生の体験にとらえ、関与する人々のもつ力やその現れ方は多様であり相互に影響し合うという学術的立場をとっている。そのうえで本論文は、家族という立場から著者自身が父親を看取る過程で出会った様々な看護師との関係に対する洞察にもとづき、看護師がいきいき働いている病棟における看護実践の質の高さと看護師のグループダイナミクスに着目し、日本の病院の臨床の現場で働く看護師たちの self-efficacy といきいき働く経験の構造について、看護師個人の経験の語りを現象学的な手法を用いて分析検討し、記述をすることを目的としている。

（対象と方法）

本論文の研究デザインは質的研究である。対象は本論文の研究背景と用語の定義に忠実に、看護師がいきいきと働き、活気のある病棟を擁する病院を面接調査対象施設として有意抽出し、調査承諾を得られた 1 対象施設の 1 対象病棟に勤務する看護師 22 名を面接対象としている。研究手順は 3 段階に分かれており、それぞれの段階において異なる質的研究手法を用いることでデータと分析の信頼性と妥当性を確保している。調査前の第 1 段階では国内外における学術論文の系統的文献レビューにより主要概念である 1) 看護師と患者の相互作用；2) 看護師のメンタルヘルスと職場環境；3) 看護師のエンパワメント；4) self-efficacy；5) 看護師のワーク・エンゲイジメント；そして 6) いきいき働くことについての概念分析を実施している。面接調査の Step1（第 2 段階）では臨床で働く看護師 22 名について

self-efficacy に関連する要素（自身の性格傾向、人生に希望をもっているか、精神的に打たれ強い方か、職場でストレスを感じるか、一緒に働く者の支援でほっとするか、職場の雰囲気が好きか、毎日楽しくいきいきと働いているか、現在、身体的・精神的に健康だと思うかの自覚について）、属性調査用紙を用い半構成的な面接調査を行っている。面接調査の録音をもとに逐語録を作成し、内容分析手法（Krippendorff, 1980/1989）を参考に質的記述的に分析を行っている。Step2（第3段階）において、著者は主観的な高い健康感といきいき働いていることを自覚している対象者に着目して分析を試みている。対象の選定方法として層別尤度比（Stratum Specific Likelihood Ratio: SSLR）を適用し「現在、身体的に健康だと思う」「現在、精神的に健康だと思う」「毎日、楽しくいきいきと働いている」の3項目の質問に、はい（0 から 6 で回答する7件法のうち、5 または 6）と回答した4名を分析対象者としている。対象者の逐語録に対して Giorgi (2009/2013) の科学的現象学的分析方法によりテーマの抽出と意味単位の分類、更に高次の意味と経験構造の分析を試みている。分析においては著者の他に精神保健看護学を専門とする研究者1名及び心理学修士を有する看護師1名と共に解釈の triangulation を実施した。

（結果）

本論文は、調査対象の看護師22名への面接調査の結果、看護師の self-efficacy の特徴として、①self-efficacy が認知される看護実践上の志向対象と内容が存在すること、②ポジティブなものとはネガティブなものがあること、③スタッフと看護師長の self-efficacy の内容は異なること、を明らかにしている。また、対象のうちの4名が主観的に高い健康感をもちながらいきいき働くことの経験の構造と意味について、「専門職としての自覚と充実感・自己コントロール可能感・ポジティブ性・信頼・人間関係志向」が共通して存在していることを明らかにしている。さらに、看護師がいきいき働く経験の意味と、活気が感じられる病棟の看護チームの特徴について下記7項目の特筆すべき点を示している。

1. いきいき働く看護師には、心身共に健康で心にゆとりがあり、他者の思いに寄り添う考え方ができ、自己の力を十分発揮しながら自律した専門職として働く姿が現れていた。
2. いきいき働く看護師は管理者のことを尊敬し、看護管理者からの支えがあることで安心し、主体的・能動的に働く姿が現れていた。
3. いきいき働く看護チームには、仲間と信頼し合い、スタッフと管理者が支え合って働きながら後進を育成し、チームワークが発揮される特徴が現れていた。
4. いきいき働く看護師がいる病棟の看護師長は、スタッフの職務や成長を支援し職場全体を下支えするサーバント・リーダーシップを基盤として心理的安全を確保し、病棟の状況やスタッフの体制に合わせて多様なリーダーシップを発揮していた。
5. 看護師の経験における相互作用において、職場資源では「患者やスタッフが安心して自己表現できる環境づくりへの能動性」、個人資源では「思考の柔軟性」「ポジティブ志向」「チャレンジ志向」「精神的ゆとり」「動機・意欲」「自己制御」「アサーティブネスな対応」「自己の成長志向」という心理的力動が記述された。
6. 看護師がいきいき働く経験の構造は、【看護専門職としての自己】【つながっている私たち】【ゆるぎない自己】【看護管理者への支持】の高次の意味と、《看護専門職としての自己存在》《専門職として成長していく時間的展望》の契機で成り立っていた。
7. 看護師がいきいき働く経験の意味は、「看護実践において、看護師が主体的で能動的に生き（主体性）、専門職としての時間的展望をもち（時間性）、看護対象や協働者との間の望ましい雰囲気を維持し（空間性）、自己の知覚と感性を十分に活用し発揮して（身体性）、看護対象や協働者との信頼関係を築いて（関係性）、専門職として成長し続けながらケアしていくこと（経験の更新）」であった。

（考察）

本論文で著者は、看護師の看護実践における self-efficacy は社会的相互作用の中で発揮されるものであり、患者とその家族や、ともに働くスタッフ、チームなど自分以外の人々のために利他的に自己の力を発揮し、人々にもたらされる結果を認知することで、看護師は self-efficacy を感じていると考察している。また、看護師の self-efficacy の特徴について、self-efficacy の志向対象は、看護の対象となる患者や家族、ともに働くスタッフに対して、自己役割遂行の対象としての意識が向かい、その役割を果たした、あるいは果たせなかった結果、ポジティブあるいはネガティブな self-efficacy と

して現れていると考察している。さらに著者は、看護師の self-efficacy は、ポジティブなものとネガティブなものから構成されていたが、自己の看護実践力の発揮や自己役割の遂行に対する自己認識など、看護師自身の受けとめ方次第でポジティブにもネガティブにも変容できると推察されるため、ネガティブな考え方を変容できれば、看護師の精神的健康が保たれ、職務遂行にも貢献でき、ポジティブな自己意識をもつことで、認知的な職務満足感だけでなく、活力や積極性といったワーク・エンゲイジメントの状態へ移行できる可能性があることを示唆しており、ポジティブな self-efficacy を保てるような看護師への支援の必要性を強調している。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、質的な研究技法を用いて日本の地方の1病院においていきいきと働く臨床看護師の在り様に着目し、看護師たちが心を砕きながら超高齢社会のコミュニティの中で専門職としてプライドを持ちながら人々をケアしている姿を詳細に分析し記述したものであり、日本の看護の知識体系に寄与するものとして意義深い。詳細な文献レビューに基づく概念分析により、これまでに明らかになっていた「いきいき働く看護師」の概念に加え、調査で得られたデータの分析によって、その概念にさらに厚みを加える新しい要素も本研究で明らかになっており、新規性のある研究論文であると評価できる。

平成30年4月2日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（看護科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。